

# 耳納風土記 28

つかんどう  
昭和28年大水害と塚堂古墳

問合せ 生涯学習課文化財保護係 ☎ 75-3343

## 大きく崩れた塚堂古墳の復旧作業



あけましておめでとうございます。2023年は皆さんにとつてどのような年でしたか？7月には豪雨災害により多くの川が氾濫し、土砂崩れが起こりました。人的被害は無かったものの床下・床上浸水の為に帰宅が困難な方もいらっしゃいました。また、文化財の被害も大きく月岡古墳の墳丘が一部崩落、装飾古墳である重定古墳・塚花塚古墳は1m以上石室が浸水しました。さらに塚堂古墳は、前方部・後円部ともに大きく崩落し、私たち文化財に携わる職員だけでなくうきは市全体に衝撃を与えました。復旧作業にも長期間を要し、現在も復旧作業中です。今回の

後最悪といわれている昭和28年大水害と塚堂古墳について見ていきましょう。災害の多い近年だからこそ読んでいただきたい内容です。

昭和28年(1953)6月、降ったり止んだりの梅雨空は25日の午後から篠突く雨に変わり、夜になってもその雨勢は衰えず26日の午前中には雨量300ミリを超えるという過去の記録と比較しても全くその例を見ないほどの豪雨となりました。

26日午前3時には古川町をひとのみし

## 札ノ辻交差点付近



付近の家屋を押し流しました。そうしていううちに濁流は袋野地区・荒瀬地区で氾濫し、日田に通ずる国道は水の底に沈みます。午前9時には巨瀬川にかけられた木橋はごとく流出、同11時には堤防まで決壊し吉井町一帯を襲いました。濁流によって夜明ダムの護岸までもが破壊され、孤立した大石小学校に難を逃れた人々の叫びは悲惨を極めたといえます。このように耳納山麓の平野地帯は見渡す限り泥海と化し、交通・通信をはじめとするすべての連絡網が遮断され、救助作業の着手さえも困難を極めました。

翌27日になっても雨の勢いは衰えず、晴れ間が見え始めたのは28日になってからのことでした。その後、直ちに対策本部を設け警察署、保安隊、消防団その他のあらゆる団体の協力援助のもと災害復旧活動が行われました。そこで活動の一端を担ったのが塚堂古墳です。バイパス沿いに位置するこの古墳、現在は後円部が大きく削られていることを皆さんご存じでしょうか？現存長約70mの前方後円墳で二重の周溝が巡っているこの古墳ですが、この大水害の時に氾濫した河川や濁流によって破壊された堤防を復旧するために大規模な土取りがされていたのです。

昭和28年といえば文化財保護法が制定されてすぐの頃ですので、文化財を守るという想いもある中でこのように墳丘を削るといふのは当時の人々の必死さが伝わってきます。調査の話をしますと水害の前後計8回調査が行われており前方部・後円部からそれぞれ1基ずつ横穴式石室が見つかっています。前方部の石室を調査した際には未盗掘だったため短甲をはじめ、直刀やガラス玉等の副葬品が埋葬当時のままの状態で見られました。残念ながら後円部の石室は基底部しか残っていませんでしたが玉類、鏡、馬具等が発見され、その一部は吉井歴史民俗資料館に展示されています。

今回の豪雨災害では24時間降水量が観測史上最も多い400ミリを超える、経験したことのないような大雨でした。朝、目が覚めた瞬間飛び込んでくる氾濫寸前の川、あの恐怖は今でも忘れられません。自然災害による被害を最小限に抑えるには、「自助」と「共助」の心構えが必要です。昭和28年大水害によって肉親を失った人、危うく命拾った人、傷ついた人、家屋を流された人など様々な人がいる中で「再び水害をくり返すな」の合言葉のもと、涙ぐましい復旧活動が進められてきました。今年もまた梅雨が来ますその時期が来たときにまたこの話を思い出していただけたら幸いです。